

明石秋室の詩・書・人物について (一)

(一) 佐伯以前の秋室

狩生熊義

明石秋室は名は肅、字は雨若、通称遷次郎といい、のち大助と改めた。秋室は号で別に桂山、土甫等の号もある。十八才ごろ養子となり、杵築を去ったので出生地には彼についての資料はない。豊田八蔵の次男として生まれた。(『杵築市誌』による。)

十八才ごろ養子として佐伯の明石家に入贅した——といふのには疑問がある。だが実は杵築市誌の資料は、昭和四十年十一月廿二日佐伯史談会が主催した、秋室百年祭の時の資料を利用したものであるから、問題は佐伯から出た訳である。

『懐旧楼筆記卷十四』(談窓全集上 P 78)に「今秋(文化九年)杵築の人豊田仙次来訪せり。歳二十余、三浦主鈴の門人なり。頗る才力あり。塾に留まること三四旬なり。余客を以て之を待てり。後に佐伯明石氏の養子

となりて彼の地に赴けり。益多、豪作二子の来遊は此人より紹介せり。其後奉行職に抜んでられ、頗る名譽あり。称を大助と改められたり」とあるから、文化九年彼は廿才である。

その後「佐伯明石氏の養子」とあるのは、明石家文書によれば文化十二年九月とあり、益多(子玉)、豪作二子が入門したのは広瀬家「入門簿」に「中嶋益多入門文化十三丙子歳三月四日紹介明石仙次」とある。

それで彼は明石家の人となったのは廿三才で、二名を紹介したのは翌年廿四才である。

明石家の人となっても毛利侯に初出仕したのは廿四才の五月十一日で御給人見習として規定の俸禄を頂いたといふのである。

出仕して二ヶ月、七月六日には学問所出席又若年者の

学問引立（指導）を仰付けられ、九月九日には「御蔵書
拝見勝手たるべし」と特別許可を受け、十二月九日には
待望の書物奉行になっている。五月に初出仕以来七ヶ月
にしてこの大役を仰せ付けられているのは、彼が明石家
への話があつた時に意向を明示したのと軌を一にしてい
る。佐伯文化史研究会編『秋室明石大助』には、「文政
三年の春憧れの書物奉行となる」と書いてあるが、文化
十三年と文政三年では四年の差がある。同書には、文政
五年十二月には現職のまま、若殿泰雲侯（毛利高泰公）
の教育掛を仰せ付けられたとあるが、これも「若殿御小
納戸御膳番で御書物奉行は是迄之通」ということになっ
ている。若殿泰雲侯へ御素読申上げたのは文政十二年彼
が卅七才の時であつた。

これも多少の違いが見られる。

話は前に戻るが杵築の豊田家の人とあり、別大学長佐
藤義詮氏の著『学禁余稿』には大助は中根太沖の弟とし
て紹介している。

両説を杵築市史には中根家の系図を調べたが「該当す
る人物なし」と報じ、「豊田家は数軒あるが要領を得な
い」と書いている。

然し豊田副武大将の生家が、豊田八蔵の家であること
はまず間違いない家系が出ている。

兄は俊作、二男が大助、三男郡平、四男恭平、五男伝
造とある。菩提寺長昌寺の過去帳を見せて頂いて確かめ
たので余り疑問の点はない。『学禁余稿』の中根太沖の
弟説は戸籍上の事実ではなくて、婚姻の時の取扱い方と
して処理したものだと思う。中根太沖という人は、大助
が指導を受けた矢野毅卿の所で、同門の先輩として親し
くしていた人であるから、その弟分としての話をつける
には最も適任者である。中根家は家老職の家柄でもある
から尚更であろう。

この両者が学んだ矢野毅卿とは、文化十三年四十四才
で亡くなった人であるから大助は廿四才の時である。そ
れを証するものに秋室自筆の文書がある。「前に杵築に
在りて詩を蕉園先生（毅卿の号）に学ぶ。先生は才気高
邁にして造語は人後に随わず。鄙心ひそかに仰慕す。当
今の作者は及ぶ無きなり。後佐伯に來たり幾ばくもなく
先生就木（死去）して、また奇作を見ず。今夕酔解けて
寝る能わず。箱を開いて先生前に青（大助のこと）に貽
せし短古一篇読みて愴然たり。遂に旧を拜し憶誦する所、

録して一冊と為す。僅く三十餘首なるも亦吉光の片羽ならん。」

「辛卯春夕秦青秋室南窓下に識す」とあるから、この時に大助は卅九才である。秋室とは彼の室号であるとして自ら弁じているが、後には号としていた模様である。

そして同年五月「貞篤又識す」と追加しているのは、「先生詩を作るに敏妙、最も古体に長ず、其の日田途中作、古意玉簪花の歌、利益寺藤花蛙の詩、中秋詩、皆古人と抗行すべく他に佳構甚だ多くして今之を忘る。他日黄城の諸君に問い必ず得る有らん」と述べている。矢野毅卿という人は三浦梅園最後の門人と云われ、十四才で入門したが梅園はその才を愛し、その指導に誠心を尽くしたと云われる。「梅園の高遠なる条理学に通ずるものは毅卿のみ」と云われ、条理学を伝える『条理余譚』を著している。梅園の孫（黄鶴の長女）を妻に迎えている。兄のあとをうけて鳥銃隊長となり、国学教授を兼ね、用人の要職に就いたが詩文を好み、七言歌行を最も得意としたと、『詩歌作家辞典』に載っているほど、詩人としての存在は大きかった。秋室も矢野先生と前述の如く古人に抗行すると云っている程の力量の持主であったようである。

ある。

大助の為にと矢野毅卿は自筆の詩一篇を書いて渡したり、意見というよりは教科書とも云うべき彼の所説を、大助の為に自筆で書いて渡したりしているのを見て頭が下る思いである。現今の教師がこんな指導をしている者があるかと思う。また大助もその時の事を追憶の底から当時覚えた詩冊数首を記録しているというのを見ても勉強の度が違うなあと思うのである。

さて、その詩集の中に「中根太沖に寄す」「中根太沖に示す」と明瞭に氏名を示した詩が三首ある。又「豊田生日田に之くを送る」というのと「豊田生久しく来らず、予の酒錢を慮つてならん」と戯賦一首と計三首が明らかに大助を指名して作った詩であることが解る。「豊田生日田に之くを送る」という詩は、「装を促し鬻ばいに乗じて江城を出づ、野店山郵三日の程、村路迢とほとして暁光浄く、秋花叢裡むらに一人行く」という七絶で、恐らく日田の淡窓の下に学ばせるために見送ったのだろう。

この師弟の間柄はまことに情愛濃やかなもののあることを感じさせられる。

詩は矢野毅卿に学ぶと自ら云っている如くその影響を

受けたことであろう。

秋室は後年その編集を計画した、『錦囊遺彩』の序文の初めに、「幼にして李王孫の詩を読みて其の奇雋を愛す」と云っている。幼時から李賀を読んだというも驚異だが、矢野毅卿の指導の影響だと推定される。それを証するものに、『矢野先生詩録』というのが、秋室自筆の写本である。その中に、李賀の作「金銅仙人漢を辞するの歌」の銅人が「魏に入るを咏ず」という詩がある。さらに李賀の特性たる鬼の詩を毅卿も作っている。黄山谷に擬した詩もあり、又李賀に傾倒した明の詩人、袁中郎の詩集を読んで感じた詩を作り、友人に贈っているものもある。これ等はいづれも毅卿が李賀の研究者であった証拠であろうが、これが豊田子芳（大助の別号？）に芽生



明石秋室書蹟

（佐伯市 山中道夫氏蔵）

えたのも不思議ではないが、幼時之に興味を感じた秋室は驚異の存在であろう。「諸孫甫めて七才、名既に京華に動く」と自らの詩にあるように、七才の李賀に心をひかれたのかも知れぬと思う。実は之は誤伝であったらしいが、秋室はそう思い込んでいたようである。いくら李賀でも七才の詩人は頂けない。

次に秋室は書を黄鶴に学んだということになっている。これは極めて自然な成り行きだと思ふ。毅卿から学べば良さそうだがこれは大助の希望というよりは、毅卿がそうさせたのではないかと思ふ。何故ならば、書は明らかに妻の父三浦黄鶴が、自分より遙かに書の名手であると毅卿自身も認めていた筈である。単調素朴な自我流の毅卿に比べれば、黄鶴は何と云っても幼時からの名手、殊に皆川淇園の下に遊学後の黄鶴は、杵築藩中随一の能書であったからである。

然し秋室の書は黄鶴にも誰にも似ていない。それこそ天下第一品、秋室独特の書風を形成していることは、天下周知のとおりである。

秋室の書に関しては後述することとして、杵築に於ける少年時代の太助の生長を略述したにとどめる。

さて次に文化九年大助廿才の時、咸宜園に淡窓を尋ね、勉学を志したのであるに、三四句で帰ったということ、淡窓が「之を待つに客を以てせり」と記しているように、客分扱いをしたということの間に、何等かの理由があったのかも知れない。『大助明石秋室』の中に「大助の勝れた才力を認めて客分の礼をもって遇されたので、三四句で帰った」と説いているが、勉学に訪れた者に入門させずに、客分扱いをして勉学に及ばずという仕打ちは、如何に学力を認めたとしても納得し兼ねる気がする。

後日、子玉・豪作両名を紹介している点から考えると、別段問題があったとも思えないので、三浦主鈴の門人が見学に来たという取扱いで、入門簿に記入させなかったのであらうと思われる。

又同書には、「藩侯の学資を賜わりて、日田の咸宜園に入門」としてあるが、前述の如く入門ではないとして、さて藩侯とは誰かと云えば、佐伯の關係者は佐伯の藩侯だと早合点する向が多いが、その頃彼はまだ佐伯の人ではなく、佐伯に来る話も出ていなかったのである。——とすれば杵築の藩侯だが、その時の藩侯は松平親良公でまだ漸く三才の幼君である。天下は騒然として伊能忠敬

や田能村竹田が来訪するかと思えば狼烟場が設置され、百姓一揆のざわめきが聞こえ、著名な人物は次々物故して大きな空洞ができた感じの時世である——有能な仙次青年の為に咸宜園に留学させるような時世ではなかったうだ。——彼は自ら咸宜園を見た目で感じた事を他日佐伯に来て、子玉豪作（古田豪作）の二子を留学させる必要を痛感したのではなからうか。藩侯の学資を賜わって行った者が簡単に帰って来られるとも思えない。

次に彼は画を鏤木雲潭に学んだというのだが、その証とするものはない。只彼の所持する書籍中に『統佩文齋書画譜抄』『空香中人漫抄』『山静画論抄』と相当部厚な三部の書籍の写本がある。『山静画論抄』とは宋の米南宮（米芾）の氣韻生動論、王維の画論、山水筆法記等の画論を石門方薰が撰をしたもので、持主は晚翠堂となっているから借りて写本したものか？

雲潭に手ほどきを受けて、後には独学でこれ等の書を参考自ら勉学したものだろうと思う。竹香中人の印が押してあるからこれは大助の画人としての雅号であろう。彼の書画小品の中に竹香中人大助と署名したものがあつた。さて空香中人とは誰か——これも大助自身らしいのであ

る。彼は晩年「、漫抄」と題した任意に氣に入った詩文を記録している。

文人画と呼ばれる当時の画は、文人に依って描かれたからそう呼ぶのだが、一体文人とは何か、——曰く詩、書、画、篆刻、印泥等に精通し、尚も萬卷の読書人でなくてはならぬというのである。読書人のにじみ出す味わいを、これらのものを通して発散するのを文人趣味という訳である。竹田でも草坪でも、杏雨も五岳も雲華もこれを目指し、学者山陽や小竹も之を追求している。これらの人々が目指した目標は、米芾であり、蘇東坡であり、黄山谷であった。この宋代の先輩は学者であり、哲人であり、宗教の求道者でもあった。

そして人間の深味を追求して芸の世界に耽ったのである。我が秋室や子玉もそれを求めた人々である。たまたまこの二人は中唐の詩人李賀がその目標であった。そして両者とも李賀の真随を得て、その面目を発揮した詩を作っている。ところが昨年は慶応大学の佐藤一郎博士が僚友と共に、五十二年には九大の上尾龍介先生が、共に子玉の調査に来訪された。清の愈摠の著書『東瀛詩選』の中に、卅四首子玉の詩が載っているし、李賀の詩風を

受継ぐ詩人として注目しその対照としたというのである。片や秋室は『大分県偉人伝』や『南豊名家詩選』に載っている程度で両書とも奇人と紹介している。李賀の研究者として「一生慕う、誰か我と同じき」、と李賀の趨拝者として打込んだ態度と、李賀の偉らさを示す方法として、他人の造語を真似ず創意工夫して新味を出す事を高く評価して、峭奇ということを尊重した——従って自らも奇を求め努めた——それが、二奇行ありと奇人伝の中に入れている。昔は峭奇を求めた奇才と高く評価したのは良いとして、現今奇人とは変人の意に用いられ、甚だしい字典には「必要以外の人」とか「余りの人」と説明している。トンでもない見当違いというべきだ——資料不足のため真相を伝えられず、単に変人の意味に使ったのかも知れないが、如何に人のしない事、変った事をするか——と云っても、湯川博士や朝永博士を奇人だと誰が云う。奇才、秀才という名にふさわしい用法をすべきだと思いがどうであろうか。

子玉も「高情自ら世人と違う」と自任している。秋室の奇行というは書を求める人に対して「天帝に奉るもの」として拒絶した。

それでも求めるから裏庭で焼いた。——奇行と見える。東涯は来訪者に向って「不在」と答える——更に問えば「本人が云うのだから間違いない」と答え、勉強時間を来訪者に妨げられる事を嫌った。智永は書を求める人が押しかけて門を破ったので鉄で造り替え鉄門軒と自称した。皆奇行である——奇行は他に大きな目標目的を持つ人がするものだ。

秋室も他に妨げられる事を嫌ってやっさに違いないと思う。自らの目標を求めるに急なため、他人の求めに応じ切れないのである。——と、私はそんな風に思えてならない。

その目標とした李賀とはどんな人か。宋の随筆「南都新書」に「李白を天才絶、杜甫を人才絶、李賀を鬼才絶」と呼んでいる。絶とはその部類の最高という意味である。中国幾万の詩人をこんな分類法で三代表を選ぶことが適當か否かは別として、前二者は誰でも知っているが、李賀を知ってる人は少ない。今では高校の教科書にも出ていますが、十年前迄は李賀の詩を全部を見る事は、まず不可能な存在で稀少価値ものだった。芥川龍之介が「将進酒」を、泉鏡花が「宮娃詞」を愛誦したというが、「古

文真宝』に三首載っていた中の二首である。今では米国のパクスターを始め、英国の女流詩人が改めて李賀を見直し、ボードレールやベルレーヌの如く、奇異な悪魔的なものと並び考えるほどになった。

中国の研究者も唐以降清朝迄百五十名の多きを数えている。如何にも研究価値のある対照だからである。その百五十名の研究した内容を皆調べていたのが我が秋室なのである。

之が奇人であろうか、変人であろうか。

鬼とは日本人の感覚の鬼ではない。霊界の異様な鬼気迫る感覚をさすのであるから、俗界の感覚から遠ざかった世界ではある。然し牛神、蛇身の化物を指すとばかり感違いしてはならぬが、杜甫や韓愈の現実主義からは程遠い天界の話ではある。

——だから変人というのであろうか。

(つづく)

